



1・2年生、陸前高田で考える

先月29日(金)1年生が復興学習の一環で陸前高田市を訪問しました。東日本大震災津波伝承館を訪問して震災がどういうものだったのか学習し、次いで、桜町中学校恒例行事となった、「桜ライン311」の桜の植樹を行い、津波到達ラインを桜でつなぐお手伝いをしてきました。

2年生も昨年度行けなかった分、今週月曜日に高田に行ってます。伝承館や一本松を見学し、午後には語り部さんのガイドで市内被災現場の見学を行いました。震災当時3～4歳だった中1・2年生も、現地でいろんなことを考えてきたようです。



◆津波や地震のことを学んでいくうちに、人のことを考え助け合うことも学んだ。自分も相手のことを考え、思いやることを頑張ろうと思った。



◆まだ苦しんでいる人や今もまだ心に辛い思いをしている人がいるので、自分ができることを精一杯していきたい。

◆今、生きていることがどれだけ幸せなことかをよく考え、1日1日を大切に生きていこうと思った。

◆今回学んだことを忘れず、後の世代にこのような恐ろしいことがあったと伝えるようにする。

◆「後世に伝える」ということはすごく難しく自分達にはできないことだと思っていたが、今回の活動で自分達も役に立てたのではと思った。



自分で自分の命を守る

先週1日(月)今年度2回目の避難訓練を、何時に行うか予告無しで実施しました。当日は、清掃直後のバタバタしている時間帯に家庭科室から出火という設定での実施でしたが、「火事です!」という放送が鳴るや、生徒はそれぞれの場所から、先生方の誘導無しでも真剣な態度で速やかに避難していました。感心でした。

なお、この日は消防署の方にもお出でいただき、消化器の使い方をご指導いただきました。



▶津波に家族をさらわれた被災者を支援する中で、「あいまいな喪失」という考え方が注目されるようになった。本当に失ったかどうかははっきりしない不確実な心の状態をいう。あいまいさが解決しないため、死別の悲嘆とは異なる複雑な感情やストレスを抱くとされる。▶「がんばれ一本松」と題した作文がある。陸前高田市の小学3年生が震災の翌年に書いた。「ぼくのお父さん どこにいるかみえないかな。みえたらおしえて一本松 おねがいするよ」男児の父親は津波で行方不明になった。▶「どこかで親は生きている」と信じたいたのに、墓を建てることになった。遺児らの作文からは、揺れ動く気持ちが伝わってくる。※たまたま目にした神戸新聞の社説からの抜粋です。震災から十年、依然2,525名の方が行方不明だそうで、「死者」と「行方不明」の違いに無頓着だった自分にとっても恥ずかしくなりました。